H25.3.9

止めどきを知る

Dr. 和の町医者日記

「抗がん剤」シリーズ⑮

末期患者との花見

毎年、クリニックの近くで末期がん患者さんを囲んで花見をしています。夏に抗がん剤を中止した58歳の肺がん患者、Aさんが年末まで生きている確率は5％ぐらいかなと思っていました。しかし、年末の忘年会では一緒に酒を飲むことができました。

その時点では、春の花見などは、確率0％だと思っていました。「いくらなんでも無理やろなあ」と思いながら、花見のチラシをAさんの部屋の壁に貼っておきました。果たして、花見の日までAさんは生きていました。クリニック主催の花見に、Aさんは歩いて参加されました。私の下手な歌のあとに、Aさんはなんとギターを弾き始めました。

両肺に大量の胸水がたまっていることを誰も知りませんし、気がつきません。「元気でのんきなオッサンがおるなー」という顔でながめています。しかし演奏後のAさんは、汗びっしょりになって「もう、これでこの世に思い残すことはないわ！」とつぶやかれました。

Aさんの親友で61歳のB子さんも同じ末期の肺がんでした。私は偶然、両者の主治医でした。それにしても親友同士が同じ臓器の末期がんになるのは珍しい。当初は、B子さんがAさんの見舞いに来ていました。しかし年が明けてからは、形勢が逆転しました。B子さんの方ががんの進行が早く、寝たきり状態になりました。

昨年は見舞われていた人が、年が明けたら逆に見舞っていた。そして、あっという間に、B子さんはご自宅で旅立たれました。AさんはB子さんの葬儀に参列しました。2週間後には偲ぶ会があり、Aさんに誘われて私も出席し、また一緒に酒を飲みました。

「あいつ、追い抜いて逝きよった…」とAさん。「みんな、いつか逝くから同じだよ」と私は心の中でつぶやきました。

そうこうしている間に、桜も散り、大型連休に入りました。さすがに、Aさんは自宅から出ることがなくなり、本格的な在宅医療となりましたが、おしゃべりのほうは相変わらず達者でした。私たちが訪問すると、いつも笑い声が絶えません。絶対に無理だと思っていた大型連休も無事通過しました。

そのころから背中の痛みが強くなり、麻薬を増量。衰弱は進む一方で、本当の終末期になっていきました。そんな中、Aさんは59歳の誕生日を迎えました。子供さんや訪問看護師、友人たちと誕生パーティーをしました。やはり、とてもうれしそう。

子供さんたちは、順番に泊まり込みはじめました。私が指示したわけではありません。子供たちから見ても終末期だと判断したからでしょう。みんなでケーキを囲んで、歌を歌いました。

Aさんは2週間後、静かに旅立たれました。Aさんは抗がん剤治療を止めてからも8カ月間仕事を続け、完璧な終活をしました。私たちと忘年会、花見、誕生日会まで楽しみました。親友の葬儀や偲ぶ会にも一緒に参加。予想よりも半年以上は長生きされました。

あの時、ちょうどいいタイミングで抗がん剤を止めたからでしょう。もし止めていなければ、もっと早かっただろうと私は想像します。抗がん剤の止めどきを、身をもって教えてくれました。末期がんと共存しながらでも働けること、人生とは楽しむことであることを。あれから、もうすぐ3年。また花見の季節が巡ってきます。

末期がん がんが全身のあちこちに転移し、増殖・進行している状態。一般的には、もはや有効な治療法はない。末期がん患者さんの余命はさまざまで、がんができる臓器によってかなり異なる。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成７年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。54歳。

ひょうご